

小川未明作

# 野薔薇

朗  
読  
  
緒  
方  
  
郁

第三卷 2. 小川未明「野薔薇」

小川未明の履歴については「月夜と眼鏡」の項を参照。



「野薔薇」は「大きな国と小さな国の国境を守る老人兵と青年兵。二人は一緒に薔薇を育てたりして仲良くなる。やがて戦争が始まり青年は戦地に赴き、老人は国境に残されるが、ある日、旅人が訪れ薔薇の香りを漂わせる」という話。発表は1923年（大正12）。第一次世界大戦を、戦場から遠い日本で経験した未明が、小説「戦争」や随筆「戦争に対する感想」等を書いた後の作品で、評論家は「国と国との争いが、どんなに理不尽に、そこに住む人々の温かい生活を踏みにじるものであることを未明は美しく哀しい童話に仕立てた」と述べている。

おほくに大きな国と、それよりはすこし小さな国とが隣り合っていました。当座、その二つの国の間には、なにごともし起こらず平和でありました。

ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊が派遣されて、国境を定めた石碑を守っていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして、小さな国の兵士は青年でありました。

二人は、石碑の建っている右と左に番をしていました。いたってさびしい山でありません。そして、まれにしかその辺を旅する人影は見られなかったのです。

初め、たがいに顔を知り合わない間は、二人は敵か味方かというような感じがして、ろくろくものもいりませんでしたけれど、いつしか二人は仲よしになってしまいました。二人は、ほかに話をする相手もなく退屈であったからであります。そして、

はる ひなが  
春の日は長く、うららかに、あたま うえ て かがや 頭の上に照り輝ういているからでありました。

ちようど、こつきよう 国境のところには、だれが植うえたということもなく、ひとかぶの 一株の野ばらが

しげっていました。その花はなには、朝早くからみつばちが飛とんできて集あつまっていました。

そのこころよ 快い羽音はおとが、まだ二人の眠ねむっているうちから、夢心地ゆめごちに耳みみに聞きこえました。

「どれ、もう起おきようか。あんなにみつばちがきている。」と、二人は申まうし合わせたよう

に起おきました。そして外そとへ出ると、はたして、太陽たいようは木のこずえうえの上に元氣げんきよく輝かがや

いていました。

ふたり 二人は、岩間いわまからわき出でる清水しみずで口くちをすすぎ、顔かおを洗あらいにまいますと、顔かおを合あ

わせました。

「やあ、おはよう。いい天気てんきでございますな。」

「ほんとうにいい天気です。天気がいいと、気持ちがいよいよよくなります。」

二人は、そこでこんな立ち話をしました。たがいに、頭を上げて、あたりの景色をながめました。毎日見ている景色でも、新しい感じを見る度に心に与えるものです。

青年は最初将棋の歩み方を知りませんでした。けれど老人について、それを教わりましてから、このごろはのどかな昼ごろには、二人は毎日向かい合つて将棋を差していました。

初めのうちは、老人のほうがずっと強くて、駒を落として差していましたが、し

この青年も、老人も、いたつていい人々でありました。二人とも正直で、

しんせつでありました。二人はふたりいっしょうけんめいで、将棋盤しょうぎばんの上で争うえつても、

心こころは打ち解けていきました。

「やあ、これは俺おれの負けかいな。こゝ逃にげつづけでは苦くるしくてかなわない。ほんとうの戦争せんそうだったら、どんなだかしれん。」と、老人ろうじんはいつて、大きな口おおを開けて笑わらいました。

青年せいねんは、また勝ちかみがあるのでうれしそうな顔かおつきをして、いっしょうけんめいに目めを輝かがやかしながら、相手あいての王おうさまを追おっていました。

小鳥ことりはこずえの上うえで、おもしろそうに唄うたっていました。白しろいばらの花はなからは、よい香りかおを送おくってきました。

冬ふゆは、やはりその国くににもあったのです。寒さむくなると老人ろうじんは、南みなみの方ほうを恋こいしが

りました。

その方ほうには、せがれや、孫まごが住すんでいました。

「早く、暇ひまをもらって帰かえりたいものだ。」と、老ろう人じんはいいました。

「あなたがお帰かえりになれば、知しらぬ人ひとがかわりにくるでしょう。やはりしんせつな、や

さしい人ひとならいいが、敵てき、味方みかたというような考かんえをもつた人ひとだと困こまります。どう

か、もうしばらくいてください。そのうちには、春はるがきます。」と、青せい年ねんはいいました。

やがて冬ふゆが去さって、また春はるとなりました。ちょうどそのころ、この二つの国くには、な

にかの利益問題りえきもんだいから、戦せん争そうを始はじめました。そうしますと、これまで毎まい日にち、仲なかむ

つまじく、暮くらしていた二人ふたりは、敵てき、味方みかたの間あいだ柄がらになったのです。それがいかにも、

不思議ふしぎなことに思おもわれました。

「さあ、おまえさんと私わたしは今日きょうから敵かたき どうしになったのだ。私わたしはこんなに老おいぼれていても少しょう佐さだから、私わたしの首くびを持ってゆけば、あなたは出しゅつ世せができる。だから殺ころしてください。」と、老ろう人じんはいいました。

これを聞きくと、青せい年ねんは、あきれた顔かおをして、

「なにをいわれますか。どうして私わたしとあなたとが敵かたき どうしでしょう。私わたしの敵てきは、

ほかになければなりません。戦せん争そうはずつと北きたの方ほうで開ひらかれています。私わたしは、そこ

へいって戦たたかいます。」と、青せい年ねんはいい残のこして、去さってしまいました。

国こく境きようには、ただ一ひとり人ろうじん老ろう人じんだけが残のこされました。青せい年ねんのいなくなった日ひから、

老ろう人じんは、茫ぼう然ぜんとして日ひを送おくりました。野のばらの花はなが咲さいて、みつばちは、日ひがあ

ると、暮くれるころまで群むらがっています。いま戦せん争そうは、ずつと遠とくでしているので、た



とえ耳みみを澄すましても、空そらをながめても、鉄砲てつぽうの音おとも聞きこえなければ、黒くろい煙けむりの影かげすら見みられなかったのであります。老人ろうじんはその日ひから、青年せいねんの身みの上うえを案あんじていました。日ひはこうしてたちました。

ある日ひのこと、そこを旅たび人びとが通とおりました。老人ろうじんは戦せん争そうについて、どうなったかとたずねました。すると、旅たび人びとは、小ちいさな国くにが負まけて、その国くにの兵へい士しはみなごろしになって、戦せん争そうは終おわったということ告つげました。

老人ろうじんは、そんなら青年せいねんも死しんだのではないかと思おもいました。そんなことを気きにかけながら石せき碑ひの礎いしに腰こしをかけて、うつむいていますと、いつか知しらず、うとうとと居い眠ねむりをしました。かなたから、おおぜいの人ひとのくるけはいがしました。見みると、一れつ列れつの軍ぐん隊たいでありました。そして馬うまに乗のってそれを指し揮きするのは、かせいの青せい年ねんでありまし

た。その軍隊はきわめて静 肅で声ひとつたてません。やがて老人の前を通るときに、青年は黙礼をして、ばらの花をかいだのでありました。

老人は、なにかものをいおうとすると目がさめました。それはまったく夢であったのです。それから一月ばかりしますと、野ばらが枯れてしまいました。その年の秋、老人は南の方へ暇をもらって帰りました。